

# 一九二七年日中両国作家の「人間事」

——佐藤春夫・田漢・芥川龍之介・辜鴻銘を中心として——

王 俊 文

## はじめに

大正時代を代表する作家・佐藤春夫（一八九二—一九六四）は日中近代文学交流史において様々な論議を呼ぶ人物である。例えば、「魯迅の名」は彼の翻訳と紹介によって「ようやく日本の文化界に知られるようになった」<sup>1)</sup>し、また、郁達夫・田漢との交友および彼らの創作に及ぼした影響は、日中作家交流における美談の一つであろう。その一方で、日中戦争期における佐藤の国策協力は両国の文人間に不信と隔絶を齎した。とりわけ盧溝橋事件の後に間もなく書かれた、郭沫若と郁達夫をモデルとする映画のシノプシス風の作品「アジアの子」<sup>2)</sup>は、佐藤のかつての親友であり弟子格でもあった郁達夫の痛烈な非難を招き、日本に留学経験を持つ中国の文学者を深く傷つけるものであった。

ところで、「アジアの子」発表に先立つこと十年、一九二七年にも佐藤は実在する中国人作家を主人公とする小説「人間事」を発表している。これはもともと『中央公論』一九二七年十月号に「一旧友」として掲載された全七節に、十一月号に「人間事」の題で掲載された全八節を加えてまとめた二部構成の小説である。佐藤は「人間事」の末尾に、「この作は前月号所載の一旧友につづけて読んでいただきたい」と付記しており、その後両作品は「人間事」の題でまとめられ、『新選佐藤春夫集』（改造社、一九三〇年五月）に

1) 丸山昇「日本における魯迅」『魯迅・文学・歴史』（汲古書院 二〇〇四年十月）所収、九五頁。

2) 『日本評論』第十三巻第四号 東京：日本評論社 一九三八年三月。

(2)

収録された。<sup>3)</sup>

前編の題名「旧日友」が示すように、この小説の主人公は、一九二二年の留学から五年ぶりに来日した佐藤の旧友田漢である。<sup>4)</sup> 小説は、佐藤が東京駅に田漢を迎えに行く場面から始まり、その三日後、駅で見送るところで終わるといふ、田漢の日本滞在の四日間（六月二六日～二九日）の出来事を描いた身辺雑記風の作品である。その中には、田漢の他に、辜鴻銘、芥川龍之介や村松梢風、「文戦派」（文芸戦線派）の小堀甚二など、多くの日中の文学者が登場し、当時の日中作家の交流や文壇の人間模様が描かれている。<sup>5)</sup>

作品が発表されるに及び、小説に描かれた事実に対して当事者から抗議が寄せられた。最初に抗議を述べたのは小堀甚二である。彼は、小説に書かれた田漢と文芸戦線派の争いが事実と異なっていると異議を述べた。文芸戦線派と田漢との論争は、田漢が佐藤の新宅に泊まったことに起因するのではなく、田漢が「惨虐な」反共クーデターを起こした蒋介石の南京政府に入ったことが論争の焦点であると主張した。その上で、観察眼の浅薄さが佐藤の芸術の限界を形成しているとして次のように批判した。

---

3) 後年、佐藤が自選した「新型外地文学」集『風雲』（宝文堂 一九四一年八月）にも収録されている。

4) 田漢（一八九八～一九六八）中国文学者、劇作家、中国湖南省長沙出身。八歳で父親を失い、叔父易象の援助を受けながら母の手で育てられた。一六年、易象に伴われて日本に留学。日本で近代劇・映画に触れ魅了された。また佐藤春夫や厨川白村などを訪ねる。二二年十月帰国。妻の易漱渝（易象の娘）とともに、「南国」と名付けた色んな演劇映画活動に取り組み、意欲的に中国近代劇運動を推進していた。一九二五年一月、易漱渝は病死。二七年六月、南京国民政府芸術部電影股長の肩書きで来日した。三二年中国共産党に入党。演劇以外、左翼映画運動の発展にも大きな役割を果たした。彼は作詞した映画の主題歌「義勇軍行進曲」は解放後（四九年後）中華人民共和国国歌に指定された。解放後中国の文芸界の要職を歴任。文化大革命直前から批判を受け、六六年捕えられ二年後に獄中で死亡した。丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』「田漢」項目（小谷一郎執筆）より引用（東京堂出版 一九八五年九月）。

5) 「人間事」は駅での見送り風景が末尾で描かれた後、佐藤春夫から「村松に宛てた上海からの手紙」による後日談で結ばれている。実際は田漢が帰国した一週間後、佐藤春夫は田漢の誘いに応じて、妻と姪を伴って江南へ旅立ったが、「田は政府の仕事が多忙であり相手をしてくれな」かったという。（「人間事」『佐藤春夫全集』第六巻 臨川書店 一九九八年十月 二九六頁）。以下「人間事」から引用する際には、引用文の後に「（『人間事』+頁数）」と注記する。また『佐藤春夫全集』は『全集』と略記する。

もし佐藤春夫氏が佐藤春夫氏でなかったならば、田漢君といふ一人の人間を見てもあんなに皮相には観察しなかったであらう。動乱の支那が作った人間としても少し複雑に深く描いたであらう。田漢君と文芸戦線の連中との論争にしても、例へ他人が佐藤氏にそういふ風に告げたとしても、も少し時代の真相に触れた直感が佐藤氏に動いたであらう。そしてあの「人間事」も、も少し「人間事」の深いところに触れた芸術となったであらう。<sup>6)</sup> (傍点は筆者による)

小堀に続き、主人公である田漢も小説に書かれた事は事実ではないと異議を申し立てた。田漢は、自分の東京訪問の目的と四・一二クーデター直後の蒋介石南京国民政府入りの理由とを佐藤が誤解しているとして、次のように述べた。「この小説は『田漢』のことを書いていると明らかに言っているが、書かれている人物は必ずしも田漢ではない。それに、佐藤氏の洞察力を疑わしめるような点がある。例えば私が東京を再遊したのは、ただ心の廢墟を尋ね、旧友を訪れるためであったが、佐藤氏は私が政治部芸術顧問の肩書きのために自惚れていると思い、第二の故郷に錦を飾りに来たと言った上に、私の政治的立場を誤解して、私怨が原因で友を敵としたと述べている。」<sup>7)</sup> 続けて、中国の複雑な事情ゆえ、外国人の佐藤の誤解を許すとして次のように述べている。

芸術家とはただ一瞥で人間性の真をつかむものだ。佐藤氏との付き合いは浅くはないが、この文章を読むと、知己を得ることの難しさを嘆かざるを得ない。とはいえ、中国の人事は皆変化が激しく、真の慧眼を持っている人でなければ、変異から統一を探し出すことは難しい。私は

6) 小堀甚二「佐藤春夫氏と田漢君」(『文芸戦線』一九二七年十二月号)、『田漢在日本』(小谷一郎・劉平編 北京：人民文学出版社 一九九七年十二月) 三二―三頁。『田漢在日本』は田漢と日本文芸界の交流に関する研究資料集であり、関係者の文章が多数収録されてある。

7) 田漢『从佐藤春夫の〈殉情詩集〉』(『佐藤春夫の『殉情詩集』から) 原文は中国語『中央日報』副刊『摩登』一九二八年二月九日 『田漢在日本』、四九頁。

(4)

佐藤氏を諒としよう。<sup>8)</sup>

この二年後、田漢は左翼作家連盟に加入した際（一九三〇年三月）、八年にわたる「南国」運動の回顧を発表したが、回顧の中でこの小説に再度言及している。そこでは、田漢は佐藤のために少なからぬ迷惑を蒙ったとして、「佐藤春夫はこの点（南京政府に入ること——筆者注）を完全に聞き間違えた。そのせいで、結構迷惑を蒙った」と述べている。<sup>9)</sup>

以上見てきたように、当事者であった田漢と文芸戦線派の両者が共に佐藤の人物理解（とりわけ外国人に対する理解）の欠如を批判し、作品に描かれた事実の歪曲を指摘していることは注目に値しよう。

この作品は、田漢の東京来訪を実録風にした作品であるため、国文学研究の対象としてではなく、田漢と日本作家との交流の資料として扱われることが多く<sup>10)</sup>、佐藤春夫の異邦人や異国に対する無理解を指摘する研究者もいる。例えば畠山香織の論文は、佐藤春夫の「無頓着な感性」を批判し、佐藤は田漢に親近感を持っていたものの、その背景（生い立ちや苦勞、生来の情熱的な気質等）や、文壇における政治的立場の日中の違いを理解せず、佐藤は田漢の立場を難しいものにしてしまったと述べている。<sup>11)</sup>

だがそもそも、「人間事」は小説であり、ノンフィクション的フィクションともいうべき作品である。それにもかかわらず、ノンフィクション的側面にのみ眼を向けた結果、当事者は作品の事実誤認に対する不満・弁解を語

---

8) 同上。

9) 田漢「我們的自我批判」（「私達の自己批判」原文は中国語）『南国』月刊第二卷第一期 一九三〇年五月出版。『田漢文集』第一四卷（北京：中国戯劇出版社 一九八七年二月）に収録。

10) 小谷一郎氏の田漢研究——『田漢在日本』（劉平と共同編集）及び「日中近代文学交流史の中における田漢」（『中国文化』第五十五卷 大塚漢文学会 一九九七年）——は田漢の日本関係の資料を収集し、田漢の四日間の行程を解明するなど基礎的研究を行っている。また、「座談会・佐藤春夫と中国」（伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年十月）にも「人間事」に触れた一節がある。しかし両者共に作品論とはなっていない。

11) 畠山香織「佐藤春夫と中国近代劇作家田漢との交友について——『人間事』から読みとれるもの」『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列』第二五巻 一九九八年三月。

り、研究者は佐藤春夫の無知に対して批判的になったものと思われる。もし「人間事」をフィクションとして読むならば、重要なのは「記述の真実」より、むしろ作者・佐藤春夫の「心境的真実」ではないだろうか。田漢を主人公とする前編「一旧友」に、後編「人間事」が加わって最終的に小説「人間事」という題名の小説が成立したことを考えると、田漢は一貫した主人公ではない可能性も考えられよう。「一旧友」から「人間事」への転換は、佐藤の視点が「一旧友」という枠を越え、「この世の事」に向かったことを示しているのではないだろうか。小説を「人間事」と命名した佐藤の意図はここにあるように思われる。このように考える時、我々には既成の佐藤の中国理解・田漢理解の妥当性という枠から離れ、より深くこの小説を読むことができるのではないか。本稿は佐藤が「人間事」を執筆した一九二七年という時代に焦点をあて、日中の文壇事情や登場する文学者の政治的立場を押さえつつ作品を再解釈することにより、当時の佐藤春夫の文学的境地を考察するものである。

## 一 「人間事」とは

まず、小説の題名「人間事」の由来である中国文人の詩について考えてみたい。

本来「人間事」は小説の第十二節で登場する「清朝の遺臣」辜鴻銘が中国料理店・山水楼で揮毫した詩「有感」の一句であった。「年来検点人間事 惟有春風不世情」（「人間事」二八六頁）。この詩は辜鴻銘の当時の心境をよく表しており、本人も気に入ったようすで、折にふれて言及している。

辜鴻銘は一九二五年四月から一九二七年六月の間、大東文化協会の招聘によって来日し、大東文化学院の教授を務めながら巡回講演等をこなしていた。彼が日本で説いた東洋文化の理想は当初反響を呼んだが、次第に冷遇され、辜は「昭和二年秋風と凍雨の横浜埠頭を寂しく、貧しく離れ」<sup>12)</sup>、翌

---

12) 薩摩雄次「辜鴻銘先生の追憶」『辜鴻銘論集』皇国青年教育協会 一九四一年、二二四頁。

(6)

一九二八年、北京で失意のうちに没した。辜鴻銘の来日については、当時彼と親しく交流していた大東文化協会の幹部・薩摩雄次の回想文と張明傑の研究に詳しいが<sup>13)</sup>、辜鴻銘が冷遇されるようになったことについて薩摩は口を濁している。辜を追憶した薩摩の文章は、辜が北京に帰ってから薩摩に送った手紙に「最近の写真を一枚同封しその横に左の文字が記されてあった」<sup>14)</sup> ことに触れているが、その「文字」とは山水楼で揮毫した詩であった。この詩は、過ぎし歳月を顧みて（「年来検点人間事」）、世情を知らない春風を咎める（「惟有春風不世情」）という意味であるが、世情にうとい「春風」とは実は辜自身を指すのであろう。世の転変に抗う辜の、寂寥とした心境が春風に喩えられて読む者に伝わってくる。薩摩も言う、「寂寥！それは、辜鴻銘先生の晩年に適合する言葉でなかったであらうか。」<sup>15)</sup>

ところで「人間事」の第十二、十三、十四節が辜鴻銘を中心に展開しているように、佐藤は辜鴻銘に対して強い関心を示していた。小説には次のような場面がある。辜鴻銘が、自分が書いた字を北京音、福建音と日本語で「朗吟してから笑ひ出して日本語で言った『ワタシ芸者！』／彼の快活は私にとって異様なものに思へた」（「人間事」二九四頁）。辜の老衰を意識してか、窓が少ないその部屋は、佐藤には「大へん陰気なものに感じられて来た」（「人間事」二九五頁）。実は「芸者」という言葉は、一九二四年に彼が康有為らを批判した時用いた表現だった。「康有為の輩は、先づ芸者位のものでありました、芸を売る者が芸者なら、文学を売る者も芸者でありませう」。<sup>16)</sup> 嘗て論敵を批判した言葉を用いて自嘲したことを佐藤が知っていたかどうか定かではないが、少なくとも辜の感傷は感じとっていたものと思われる。

---

13) 張明傑「日本に夢を託す——晩年の辜鴻銘と日本」『明海大学教養論文集』第一三巻 二〇〇一年十二月。

14) 「辜鴻銘先生の追憶」『辜鴻銘論集』、二五〇頁。

15) 「辜鴻銘先生の追憶」『辜鴻銘論集』、二四九頁。

16) 「文化的教養とはなにぞや」（一九二四年十月十四日大東文化協会に於ける講演）、『辜鴻銘論集』。

佐藤はこの辜鴻銘の姿が頭から離れず、すぐに彼を題材とする小説の構想に入った。田漢が帰国した僅か一週間後、佐藤は田漢に誘われて、約一ヶ月間（七月十日～八月三日）上海・南京などを訪れており、その上海行きの船上で、佐藤豊太郎に宛てて次のような手紙を書いている。

先日、支那清朝ノ遺臣トシテ有名ナ儒者辜鴻銘ニ或ル支那料理屋デ偶然逢ヒ、書ヲ二枚書イテ貰ヒマシタ。面白イ人デ、コノ偶然ノ面会モナカナ面白イワケガアルノデ、近クーツ小説風ニ書キタイモノデス。<sup>17)</sup>

「清朝ノ遺臣」といえば、佐藤が一年前『改造』の特集『現代支那号』（一九二六年七月）で清朝の大官を描いた短編小説「李鴻章」が想起される。だが、佐藤は自分と辜鴻銘の出会いを「李鴻章」のように単独の小説にしなかった。それは、二人の出会いが田漢の来日中だったという理由以外に、当時自殺した佐藤の親友・芥川龍之介の存在が影を落としているのではないだろうか。辜鴻銘に関する小説執筆の構想を述べた直後、佐藤は上海で内山完造から芥川の自殺を聞かされ、大きな衝撃を受けている。

佐藤は辜の言行を小説「人間事」に描いたように、辜の「老衰」や「寂寥」、彼の運命（冷遇されて帰国等）に強く同情していたが、この同情は佐藤の親友・芥川龍之介とも無関係ではない。というのは小説「人間事」に芥川の「支那遊記」（一九二五年）の記述を意識した部分が見られるのである。芥川が中国滞在中に会った人物は多いが、「支那遊記」には四人の人物しか記されていない。辜鴻銘はその中の一人である。芥川は辜鴻銘のことを「先生」と称し、「聊センチメンタルにな」るほどに深い感銘を受けており、辜も芥川に終始好感を持って接していた。<sup>18)</sup> このことを意識してであろう、佐藤は「人間事」の中で、辜と出会った後「支那遊記」を思い出しただけでなく、辜と分かれたのちも「歩きながら」「自分自身に言った『面白かった

17) 「七月十日 佐藤豊太郎宛」『全集』第三六巻 二〇〇一年六月、八九頁。

18) 張明傑「芥川龍之介と辜鴻銘」『明海大学教養論文集』第一二巻 二〇〇〇年十二月。

(8)

な、今度、芥川に会ったら話してやろう。彼が会った時の模様も聞かう。』と述べている（「人間事」二九四頁）。また、「支那遊記」の中で、芥川は辜に対して「先生、幸に咎むること勿れ、先生の老を嘆ずるよりも先に、未だ年少有為なる僕自身の幸福を讚美したり」と書いたが、佐藤はこの節を念頭に置き、「人間事」の村松梢風宛の手紙の中で、自殺した芥川がかつて辜を訪問した帰途、辜の「老」を思っただけ自分の青春を祝福したことを述べ、当時、芥川には厭世観が無かったと述べている（「人間事」二九六頁）。

つまり、佐藤は上海行きの船の上で一週間前に会った辜鴻銘に興味を寄せ、短編「李鴻章」に続く辜鴻銘を描く作品を書こうとしたものの、杭州から上海に戻り内山完造から芥川龍之介の自殺を知らされると、佐藤の心に芥川「支那遊記」の辜鴻銘像が突如明亮に甦ると同時に、自殺した親友をしのぶ寂しい心情が、「面白い」存在としての辜のイメージに替わって時代遅れと揶揄される辜、世間の冷たさ——「人間事」を詠む寂しい辜のイメージが浮かび上がり、彼に対する共感を深めたのではないだろうか。それ故に、佐藤は自分と辜の「奇遇」を「人間事」という小説に書き入れたものと推測されるが、その変化をもたらしたものが芥川の死であったと言えよう。佐藤はかつて芥川（及び谷崎潤一郎）の中国旅行は「自分の発案に促されたのであった」と述べているが<sup>19)</sup>、このような彼にとって辜を小説に書くこと自体、死んだ親友に対する一種の記念であったと言えよう。

## 二 芥川龍之介——「人間事」の内的な線

小説の末尾で、佐藤は村松宛の手紙に「芥川のことを書くつもりでつい余分なことまで」書いたと述べている（「人間事」二九七頁）。これは手紙の内容について言ったものだが、それは小説についても同様だと思われる。佐藤は芥川の訃報に接すると、改造社の山本実彦社長に「すぐにお悔みの電報を

---

19) 佐藤春夫「からもの因縁」『支那雑記』大道書房 一九四一年十月。『全集』第二巻 一九九九年八月、一八二頁。



打)<sup>20)</sup> ったと言う。佐藤はその時、六年前に芥川が滞在した時と同じ旅館(萬歳館)に泊まったため、「コノヤドニトマツテキタコトアリトフロバンノオヤヂモカナシメリ」<sup>21)</sup> と述べている。

ここで、佐藤が八月三日に上海を立ち、五日に日本に戻ってから以後の一年間に書いた主な作品を見てみよう(雑誌発表分のみ)。

『是亦生涯』(『改造』、一九二七年九月号)

「芥川龍之介を哭す」(『中央公論』、一九二七年九月号)

「一旧友」(『中央公論』、一九二七年十月号)

「人間事」(『中央公論』、一九二七年十一月号)

「揚州十日記」(『中央公論』、一九二七年十二月号)

「老青年」(『改造』、一九二八年一月号)

「燕」(戯曲)(『改造』、一九二八年四月号)

「芥川龍之介を憶ふ」(『改造』、一九二八年七月号)

この中で、『是亦生涯』と「芥川龍之介を哭す」は芥川記念号に掲載された文章であり、「芥川龍之介を憶ふ」は芥川の一周忌を控えた時に書いた回想記である。「揚州十日記」は中国「筆記」の翻訳で、その年の中国旅行の産物である。小説「老青年」の主人公・山野のモデルは数十年間上海に滞留した俳人・島津四十起であるが<sup>22)</sup>、芥川龍之介の「上海遊記・城内(上・中・下)」で登場する案内役も島津である。「上海遊記・城中(下)」に「鳥を一つ買って来ますから」と去って行った四十起を待っていた間、芥川が「梅蘭芳の写真を眺めてゐた。四十起氏の帰りを待ってゐる子供たちの事などを考えながら」という描写がある。<sup>23)</sup> 彼は内山書店を中心に作られた「支那劇研究会」と「文芸漫談会」のメンバーで、七月一八日と二〇日の夜、佐

20) 「佐藤智恵子氏の聞き書」『郁達夫資料補編(下)』東文研附属東洋学文献センター、一九七三年三月、二〇〇頁。

21) 『是亦生涯』「全集」第二十巻 一九九九年一月、一一四頁。

22) 内山完造「文芸漫談会の思出」『魯迅の思い出』社会思想社 一九七九年九月、三〇九頁～三一〇頁。

23) 「上海遊記」『芥川龍之介全集』第八巻 岩波書店 一九九六年六月、二五頁。

藤春夫と会っている。<sup>24)</sup> 佐藤春夫の「老青年」の冒頭は、大阪に残された長女が上海に戻った父親の山野へ宛てた悲しい手紙であったが<sup>25)</sup>、佐藤は芥川の「上海遊記」を頭に置いてこれを書いたと思われる。

このように、佐藤にとってこの年の創作テーマは芥川であった。芥川の自殺後の追悼文と回想記は言うまでもなく、芥川との共通の知人を描いた作品からもそれが伺える（「妻譲渡事件」の終結と見なされる連載の新聞小説「神々の戯れ」は除く）。当然ながら小説「一旧友」も「人間事」も例外ではなく、両作には隠れたテーマとして芥川が存在があった。

実際、小説には芥川龍之介の影が色濃く存在し、とりわけ芥川の中国ものを意識した描写が散見される。例えば第五節の末尾に、川原で竿を担いでうしろ向きに小便をする父親が登場するが、それは芥川「支那遊記」に登場する、上海旧城内の湖心亭で悠々と蓮花池へ小便をする中国人を連想させる。佐藤は、この父親と、風呂敷を頭から被って小雨をしのいでいた少年を見て、「自分では物悲しく、外の人々にはそれぞれに気の毒をしたやうな気がした」と述べている（「人間事」二六七頁）。また、第六節の末尾では、佐藤が田漢の母方の叔父とその娘で彼の妻の事を聞いて、「この夫妻が由来熱情的な地方として知られてゐる湖南の民であることを思い出さずにはゐられなかった」と述べているが（「人間事」二六九頁）、その時、佐藤は芥川の「湖南の扇」が念頭にあったと思われる。<sup>26)</sup>

後編「人間事」は佐藤の行動を中心として展開しているため、芥川は更に頻繁に登場する。例えば『新潮』合評会や、帰りの車での同乗、佐藤の新居への訪問、山本実彦が田漢のため催した宴会などの場面で芥川は頻りに顔を出す。合評会の帰り、二人が正宗白鳥について話した時の芥川の穿った説

---

24) 「佐藤智恵子氏の聞き書『郁達夫資料補編（下）』 東文研附属東洋学文献センター、一九七三年三月、二〇一～二〇四頁。

25) 「老青年」『全集』第七巻 一九九八年九月、五～十八頁。

26) 「湖南の扇」及び佐藤春夫と芥川龍之介の作品に於ける「扇」の意味について、藤井省三「芥川龍之介の北京体験——短篇小説『湖南的扇』和佐藤春夫の『女誠扇奇譚』」（陳平原・王德威編『北京：都市想像与文化記憶』北京大学出版社 二〇〇五年一月）を参照。

を、佐藤は随筆「芥川龍之介を憶ふ」で次のように述べている。「果たしてそれが正宗氏をよく解釈してゐるかどうか知らないが少なくともその言葉は芥川自身をかなりよく語ってゐるやうに思ふ」。<sup>27)</sup> また、佐藤はその年の一月下旬、「芥川が夜の三時までも話込んで行った事を思ひ出し」たと書いているが（「人間事」二七九頁）、この事は佐藤が他三篇の回想文で必ず触れるほど彼にとって強烈な思い出であった。したがって「人間事」における田漢の行動が小説の主線であるとすれば、佐藤の芥川への思いは小説を構成する内的な線と言えるのではないだろうか。但し、それは単に親友を失った悲しみではなく、芸術家としての「血族」を失った悲しみであり、さらには一九二七年という転換の時代に芥川と共有した「不安」であったと思われる。

芥川の死は大正文学の終焉を象徴する事件であったが、それは佐藤とも無縁ではなかった。<sup>28)</sup> 佐藤は自分と芥川の芸術上での血縁関係についてこう述べている。自分と谷崎が「芸術の上でも血族には相違無いが芸術の距離の近似に於いては谷崎よりも寧ろ芥川にずっと似てゐるやうな気がする」。<sup>29)</sup> このような二人は「我々の文学的才能に就いて悲観した。十年前の抱負が失はれたことを告白し合つたのだ」。<sup>30)</sup> このような「悲観」は、芥川の死によって佐藤にいっそう時代の転換に対する「ぼんやりした不安」をもたらし、「人間事」という小説の深みを形成していると思われるのである。その佐藤の「不安」を考察する前に、まずは小説における田漢の描写を検討しておきたい。

---

27) 「芥川龍之介を憶ふ」『全集』第二十卷 一九九九年一月、一七六頁。その「言葉」とは「あの人は非常に弱い人で人生が恐ろしいからいつも人生に対して白い牙を出してゐるのだ」である。

28) 芥川と佐藤との関係については「佐藤春夫と芥川龍之介」（中田雅敏 『国文学解釈と鑑賞・特集 佐藤春夫の世界』二〇〇二年三月）、『芥川龍之介新辞典・佐藤春夫』（関口安義編 翰林書房 二〇〇三年一月）を参照。

29) 「芥川龍之介を憶ふ」『全集』第二十卷 一九九九年一月、一七四頁。

30) 「芥川龍之介を憶ふ」『全集』第二十卷 一九九九年一月、一六九頁。

### 三 田漢の曖昧性

小説には、田漢が「ブルジョア作家」である佐藤の新居へ泊まったと文戦派に詰問されたことが書かれ、さらに佐藤が左翼作家たちの思考が硬直していると皮肉を言う場面が見られる。しかし小堀甚二は、文戦派が田漢の佐藤邸滞在を責めた事実はないと断言している。小説で佐藤は、田漢と「文芸戦線派」の論争の様子を村松梢風から聞いたことになっている。作品には、その場に居合わせたような村松の口調が描かれているが、実際、小説では「田は朝早いうちから、『文芸戦線』の同人のひとりが来て一緒に出て行った」と描かれており（「人間事」二七九頁）、田漢「我們的自我批判」でも、村松梢風がその場に居合わせたとは書かれていない<sup>31)</sup>。村松梢風は、八月一日に出版した個人雑誌『騷人』においてこのことに言及し、田漢のために「文線派」に異議を表しているが、そこでも自分が同席したとは言っていない。<sup>32)</sup>従って、村松は田漢本人から論争のようすとその原因を聞いたのであろう。一方、田漢も一九二八年二月に発表した文章<sup>33)</sup>で佐藤の小説により迷惑を蒙ったと不平を漏らした時でも、この事には触れていない。小堀もこう推測している。「あの時の論争の真因と経過とは、田漢君としては心の中に何等かの摩擦なしには滑らかに語り得ない種類のものである、それが無意識に（有意識とは思ひたくない）田漢君をして、そんな虚言を言はしめたのであろう」。<sup>34)</sup>以上に鑑みるに、佐藤春夫と「文芸戦線派」の論争の「元凶」はむしろ「虚言」を吐いた田漢にあると言えよう。

だが、そもそも問題にすべきは、田漢が立場の異なる三者——プロ作家、大衆文学作家（村松）、「ブルジョア作家」佐藤を迎えに呼び出した事にある。つまり、佐藤と「文芸戦線派」の揉め事は田漢の両者に対する曖昧な態

31) 「我們的自我批判」『田漢文集』第十四卷、二七七～二七八頁。

32) 「騷人録（一）」（『騷人』第二卷第八期 一九二七年八月）『田漢在日本』、二四〇～二四五頁。

33) 田漢「从佐藤春夫の『殉情詩集』」《中央日報》副刊《摩登》一九二八年二月九日。

34) 小堀甚二「佐藤春夫氏と田漢君」『田漢在日本』、三二一頁。

度に起因している。この曖昧さは、当時日本文壇の状況に対する田漢の無頓着や、彼の性格に因るものかもしれないが、当時（一九二七年）の田漢自身の立場の曖昧さとも無関係ではあるまい。

一九二六年七月、国共合作によって各地の軍閥政権を打倒し中国を統一する「北伐戦争」が始まった。しかし翌年四月一二日、北伐軍総司令の蒋介石が共産党の勢力拡大を怖れて反共クーデターを敢行すると、国民党は一時左右両派に分裂した。国民党左派は武漢で政府を建て、蒋介石の南京政府と対立した。このクーデター直後に上海に行った文芸戦線派の小牧近江・里村欣三への寄せ書きで、田漢は「全世界無産階級文学者聯合起来！」（万国のプロレタリア文学者よ、団結せよ！）<sup>35)</sup>と書いた。だが、彼が日本から戻って書き始めた自伝体長編小説『上海』には、当時求めていたのは「イゴイズムをはなれた愛」とある。一般に、田漢の左翼への方向転換は一九二九年だと言われており、山上正義も一九三〇年初に発表した文章で次のように述べている。「一九二九年の田漢君は全く別人である。…（史劇「孫中山之死」が上演禁止に逢うや）彼はそを一転機として急角度に所謂左傾し社会意識の獲得から、階級闘争への積極的な働きかけまで示すに至ったのである。」<sup>36)</sup>つまり一九二七年当時、田漢の政治的立場は曖昧なものであった。この曖昧さは、『上海』の前半が「イゴイズムをはなれた愛」を歌っているにも関わらず、末尾で「No struggle no drama」「Struggle for life」を呼びかけているような不可解さにも反映されている。つまり、この意識の変化は執筆時期の違いに起因するのではないか。<sup>37)</sup>自伝体小説『上海』のテーマの曖昧さも、ある意味において、田漢の立場の曖昧さを象徴していると言えるだろう。

このような当時政治的に「曖昧」だった田漢を、佐藤は田漢の性格的な

35) 小牧近江・里村欣三「青天白日の国へ」（『文芸戦線』第四巻第六期 一九二七年六月）『田漢在日本』、二二六頁。

36) 「今日の支那劇壇」（『劇場文化』創刊号 一九三〇年二月）『田漢在日本』、四一三頁。

37) 『田漢文集』第一四巻によれば、この小説は「最初一九二七年十月十六日から十二月三日まで上海の『申報・芸術界』に連載されていたが、未完、一九二九年五月から八月まで上海の『南国月刊』第一巻第一、三、四期に全文刊完」という。一七五頁。

「曖昧」さとして小説に描いている。佐藤が描いた田漢は様々な様相を見せるが、前編「一旧友」の中の田漢は、青春の思い出を懐しみ亡き妻を偲ぶために東京に来たというように、センチメンタルに描かれている。<sup>38)</sup> 例えば、佐藤が出迎えの時に連れて行った連れ子のみよ子を見て、田漢が亡き妻を思い出さず場面や、玉川旅行や到着日の夜に山水楼で書いた日記など、随所に田漢の感傷が描かれている。しかも、田漢夫婦が湖南出身と知って、佐藤は芥川の「湖南の扇」に登場する「情熱的な」湖南の民を連想するなど、親友の芥川を亡くしたばかりの佐藤の寂しい心情が、来日した田漢のセンチメンタルな心情に重ね合わせて描かれてもいる。田漢の描写はこうした二重のセンチメンタルな心情によって彩られているのである。

その一方で、小説での田漢は、第二の故郷・日本に錦を飾るために来訪した俗物であり、また南京国民政府入りした原因を個人の怨念に帰す卑怯者のように描かれているが、それは当然田漢にとって不満なものであった。但し、小説には田漢自身が主張する来日目的は第七節の冒頭にはっきりと書かれてあるので、田漢が不満としたのは、小説に描かれた自分の俗物的な態度であろう。例えば、小説の田漢は主義や派閥を気にせず、可能な限り多くの日本文壇の有名人に会いたがったり、自分の記事が掲載された新聞に強い興味を示し、「明らかに少々得意の面持さへ加はって、それを雷<sup>39)</sup>に渡して見せ」たり（「人間事」二七四頁）、田漢が昔の大家夫妻を訪れたとき、彼等が「田の出世を心から喜んでくれた」という話を佐藤に語ってもいる（「人間事」二八四頁）。このような得意げな様子を田漢本人は否定したが、さりとて全てが佐藤の捏造ではないだろうと思われる。中国の現代文学評論家李輝は田漢の知人にインタビューし、次のような話を聞いている。田漢は日中

38) 一九一六年から東京に留学していた田漢は一九二〇年の夏休みに一時帰国し、同年の十月にフィアンセの易漱渝を連れて日本に戻り、一九二二年九月まで一緒に東京に留学していた。一九二〇年十二月末、易漱渝の父、田漢の叔父易象が軍閥に殺害された後、二人は同棲するようになった。（劉平・小谷一郎「田漢留学日本大事記」『田漢在日本』四三二頁～四四五頁）

39) 雷は田漢に中国から同行した国民党軍官である。

戦争中、国民党総政治部第三庁で戯劇方面の担当者になり、軍装を着る機会があった頃、「彼はほかの人よりうきうきしていたようだった。…どんな場合でも軍装を着、少将の肩書きをつけ、軍の長靴を履き、長距離行軍で、擦れて足に血まめができて、甘受したのだった」。李輝はこう指摘する。「多分彼は、よく見られるたくさんの芸術家と同様に、自分が社会的な場において皆の注目の的になることを望んだのだろう」。<sup>40)</sup> 勿論、佐藤の田漢像には、中国滞在中、南京政府の公務を口実に佐藤に親切ではなかったことに対する不平も含まれていたかもしれないが、このような得意げな田漢の描写は彼の生来の性格とも無関係ではなかったと言えよう。

また佐藤は、田漢の南京政府（反革命政府とされた蒋介石側の政府）入りの原因は、田漢の敵が革命政府とされた武漢政府にいたため——出産を控えた妻（叔父の娘）が、父が殺されたため哀しみのあまり出産後世を去ったが、その元凶が武漢政府にいたため——と書いている。この事は田漢の不幸な境遇を物語るものとされているが（第六節の記述）、この話はフィクションである可能性が高い。田漢の叔父が殺されたのは一九二〇年一月二五日であり、妻の易漱滄が出産したのは一九二三年、死亡は一九二五年一月であった。<sup>41)</sup> この不幸な物語は田漢が語ったのか、或いは佐藤の「無頓着な感性」による「創造」なのかは不明である。だが、事実と食い違う箇所があるとしても、それはあくまでも佐藤春夫の心境に基づいた私小説的田漢像であると同時に、一九二七年という時点における田漢の政治的立場の曖昧さとも関係があるだろう。よって小説に描かれた田漢像を佐藤の「無頓着な感性」にのみ帰することはできない。

#### 四 「神経質」——佐藤春夫・田漢・芥川龍之介・辜鴻銘

以上、佐藤春夫をめぐる小説の人物たち——辜鴻銘、芥川龍之介、田漢を論じてきた。この四人はそれぞれ気質が異なるものの、ある点において共通

40) 李輝『田漢：狂飈中落葉翻飛』（中国語）鄭州：大象出版社 二〇〇二年一月、四五頁。

41) 張向華『田漢年譜』北京：中国戯劇出版社 一九九二年十二月。

(16)

している。ここでは四人の気質を表す「神経質」という言葉に注目したい。

まず、田漢、佐藤、谷崎のいくつかの文章からこの言葉の使用例を見てみたい（傍点は筆者による）。

(一)、佐藤に対する田漢の言葉：

- 1 田漢の回想に記された佐藤に対する印象：「彼（佐藤）は神経質な中年男だ。…谷崎潤一郎は、私に対する印象を書いた文章の中で、もしも人の紹介が無かったら私が東京の文士だと疑うところだったと述べている。おそらく私が佐藤春夫氏に少し似ていたためだろう。」<sup>42)</sup>
- 2 田漢が南京政府入りしたことについての佐藤の見方に対する感想：「それともあの神経質な小説家の佐藤春夫が『人間事』で言ったように、私怨を晴らすためなのか？」<sup>43)</sup>
- 3 田漢が東京で語った、亡妻の佐藤に対する印象：「神経質と言へば、佐藤さんも僕が知ったころは、今よりもっと、むづかしい顔していたよ。僕の妻、あなたを見てさう言った。」（『人間事』二六六頁）

(二)、田漢に対する佐藤の言葉：

- 4 駅で五年ぶりに会った田漢：「相変らず瘦せた神経質な様子」（『人間事』二六二頁）
- 5 文芸戦線派との論争後に落ち込んでいた田漢：「神経質な彼」（『人間事』二八〇頁）

(三)、田漢の自分の息子に対する態度：

- 6 「大変神経質、何でも分る」（『人間事』二六四頁）

(四)、谷崎が「顔つなぎの会」で田漢を初めてみた時の印象：

- 7 「神経質な眼を光らしてゐるところ、…宛としてわれわれの二十時代を思ひ出させる。」<sup>44)</sup>

---

42) 田漢「卡特格里特博士の私室」（中国語）『田漢散文集』上海：今代書店 一九三六年七月、一四四頁。

43) 『我們的自我批判』、二六六頁。

44) 「上海交遊記」（『女性』第九卷第五、六期、第十卷第二期 一九二六年五、六、八月）『田漢在日本』、一〇五頁。



## (五)、佐藤春夫の芥川像：

8 「先天的に内気な<sup>●</sup>神経質<sup>●</sup>に過ぎた」<sup>45)</sup>

## (六)、佐藤春夫から見た辜鴻銘：

9 「その目は…<sup>●</sup>神経質<sup>●</sup>な光を放っていた」(「人間事」二八六頁)

このように、当事者たちが執筆した小説、回想文や人物評などには「神経質」が多用されている。田漢と佐藤は互いに「神経質」と感じており、二人の共通の友人・谷崎から見て、田漢と佐藤は「神経質」な風貌が似ていたという。<sup>46)</sup> その風貌は谷崎に「われわれの二十時代を思ひ出させ」た。彼等の二十代とは、佐藤が芥川と「芸術上での血縁関係」で結ばれ、共通する「抱負」を持った華やかな大正時代であった。<sup>47)</sup>

ところで「神経質」という言葉は当時どのような意味を持っていたのだろうか。安藤宏は佐藤春夫(『田園の憂鬱』)と広津和郎(『神経病時代』)の共通点に注目し、大正期の半ばから大正期教養主義の「実体性に『感覚』や『神経』ということばによって切り込みをかけていくような動きがすでに出始めていた」と指摘している。<sup>48)</sup> また三浦雅士は「青春も青年も…とりわけ大正から昭和にかけての一時期、倫理として、また美として、猛威をふるった」と述べている。<sup>49)</sup> 芸術至上主義と自意識の確立を目指していた谷崎、佐藤、芥川にとって、「神経質」とは鋭敏な感性をよりどころとする作家の芸術性や人生を指す言葉であった。この三者は二十、三十の若さで大正期に文壇の主演として活躍したため、「神経質」は彼らの「青春」を喚起する代名詞でもあった。従って、一九二〇年代の後半に佐藤や谷崎がこの言葉を多用したのは、大正教養主義の時代の終焉を彼らが感知しつつあった

45)「芥川龍之介評伝」(『近代日本の教養人』実業之日本社 一九五〇年六月)『全集』第二三巻 一九九九年十一月、三四五頁。

46)「(田漢の——筆者注)風貌は甚だ日本人に近く、何処やら佐藤春夫に似た面影があっ」たとある。「きのふけふ」(『文芸春秋』一九四二年六月号～一二月号)『田漢在日本』、一八三頁。

47)「芥川龍之介を憶ふ」『全集』第二十巻 一九九九年一月、一七四頁 一六九頁。

48)安藤宏「小説Ⅳ——大正文壇の成立」『近代の日本文学』(野山嘉正・安藤宏著)放送大学教育振興会 二〇〇三年二月、一二四頁。

49)三浦雅士『青春の終焉』講談社 二〇〇一年九月、三五頁。

からではないだろうか。彼らはプロレタリア文学の台頭や「他者としての大衆」<sup>50)</sup>の出現によって自分達の「青春の終焉」を予知し、それゆえに一層自らの芸術性を指す言葉を多用したのだと思われる。つまり一九二〇年代の「神経質」という言葉は、三者の気質と芸術的な特徴を示すだけでなく、彼らの青春の喪失感を語るキーワードでもあったと言えよう。

ところで中国の文学者である辜鴻銘や田漢も「神経質」的な容貌であったとされるが、実は「神経質」の内容はかなり異なる。辜鴻銘は東洋文明の伝統に固執し、日本と中国の西洋化を危惧していたために「その目は…神経質な光を放っていた」のである。一方、田漢は友人知己の日本文学者が抱える「個人と大衆」の調和という課題もなければ、中国の旧文学者が固執する「東洋文明」擁護論者でもなかったが<sup>51)</sup>、一九二七年という時点において、「個性の完成」と「社会の改造」<sup>52)</sup>という宿命的な「政治と文学」の問題を抱えていた。「上昇期の日本帝国」と異なり、「独立国ではない」近代中国の「阿Q的現実」のもとで、文学者たちは「芸術的完成」を追求する余裕を与えられず、政治か文学という「二者択一」の難問に答えなければならなかった。<sup>53)</sup>この内なる緊張が田漢の「神経質的な様子」を一層際立たせたと思われる。だが、佐藤はこのような違いを描き出さず、自分の心境に引き寄せて辜鴻銘と田漢における「神経質」を描写したため、当事者の抗議を招く事態になってしまったのではないだろうか。

## 五 「ぼんやりした不安」

佐藤の芥川追悼文「芥川龍之介を哭す」において、佐藤は芥川に「喋るよ

50) 柄谷行人〔編〕『近代日本の批評 I 昭和篇上』講談社文芸文庫 一九九七年九月、二二～二三頁。

51) 村松梢風は、中国の新文学者は「決して単なる芸術家でないと同時に単なる政治青年ぢやない。芸術のために政治を利用し、政治のために芸術を利用しつつある」と述べている。「騷人録 (一)』『騷人』第二卷第八期 一九二七年八月 『田漢在日本』、二四二頁。

52) 小谷一郎「創造者と日本——若き田漢とその時代」『近代文学における中国と日本』(前出)、三二六頁。

53) 武田泰淳「中国の小説と日本の小説」雑誌『文学』一九五〇年五月号。

うに書く」ことを勧めたと述べているが、芥川の死の直後に書いた身辺雑記風の小説「人間事」自体もそのような意図のもとに書かれた小説である。一見、散漫な文体であるが、実は吉田精一が指摘する通り、「よく整理されていて…思いかけず複雑な味を蔵して」<sup>54)</sup> おり、行間から亡き友・芥川への思いと「口に出されない沢山のこと」（「芥川龍之介を哭す」）が伝わってくる。

芥川の死は大正文学の終焉を象徴していると言う。丸山真男によれば、大正末と昭和初期の間は思想上、文学に対する政治（＝科学）の優位の時期であった。丸山は、日本の近代文学が初めて接触した「論理的な構造を持った思想」、「唯一の科学的世界観」としてのマルクス主義とその担い手である共産党が文学に対して強大な権威を持ったと指摘する。<sup>55)</sup>『毎日常鑑』によると、一九二七年の文壇状況は「急に、いちじるしく文学者の数が減ってしまいました。…文壇は極度に沈滞している。極度に衰微している」<sup>56)</sup> と言う。当時の佐藤の文芸評論にも同様の表現があり<sup>57)</sup>、また、その文章に於いて、彼は次のように述べている。

かういふ時代に生まれて来てゐるのだから書けるだけ書いて、それで役に立たなくなれば自分の天分がこの時代、この国土に生きるに足りなかつたと観じてあきらめるよりほかない。…時代に取って不要になれば僕はいつでも引さがるが。<sup>58)</sup>（傍点は筆者による）

この表現は、「人間事」における田漢の辜鴻銘をめぐる次のような議論に

54) 吉田精一「解説」講談社版『佐藤春夫全集』第七巻 一九六八年、六二九頁。

55) 丸山真男「近代日本の思想と文学」岩波新書『日本の思想』二〇〇四年十一月第一八八頁～八五頁。

56) 『毎日常鑑』毎日新聞社 一九二八年、五四五頁。

57) 「私の観る今日の文壇」『文章倶楽部』第十二巻第五号 一九二七年五月）『全集』第二十巻 一九九九年一月。

58) 同上、九七～九九頁。

通じていると思われる。

誰にでも花のさく時代ある。その時代はいつまでもない。現に我々にしても一つの時代をつくったら、あとはも用がない人間になる。それでいいのだから…（「人間事」二九五頁）

一九二七年五月、佐藤は「私の観る今日の文壇」において、文壇の沈滞を打開するため、プロレタリア文学を「自然主義」文学ととらえ、その「進出」を歓迎した。しかし七月、芥川が自殺した直後に書いた「人間事」では、「文芸戦線派」の「異質なものを徹底的に拒絶する硬直した思考法」やセクト主義に対し、強烈な反発を示している。「自分の旧友の一人をもそこへ迎へることができないといふそんな世界が、我々の新しい世紀曙光として現はれてゐるとすれば、一たい夜があけたならばどんな日が来るのだらう」（「人間事」二八〇頁）。だがそのような皮肉な口調の傍ら、「私はさういふ仲間になれない自分をさびしいとも感じた」とも述べている（「人間事」二八〇頁）。つまり佐藤は「一個の頹廢者」として「活活としたものを求めて、沈滞を嫌」ったのであったが（「人間事」二七二頁）、時代の変化に伴走できぬことに対して不安を感じざるを得なかった。とりわけ同年であり、「芸術の距離」が「ずっと似てゐる」親友・芥川の自殺によって佐藤の神経はいっそう鋭敏になり、自分もまた「新しい世紀」の仲間に加わることができない憂慮を感じていたと言えよう。この寂寥を含んだ不安から、佐藤は辜鴻銘の詩「年来検点人間事 惟有春風不世情」に共鳴したように、田漢の青春の喪失に対する感傷や家族を偲ぶ心境<sup>59)</sup>に対する同情と理解が生まれたのではないだろうか。それゆえ、田漢や辜鴻銘のエピソードは彼等中国文人の個人

59) 田漢はその年の三月、亡き妻・易漱渝の友人・黄大琳と結婚したが、意思の疎通はよくなかったようである。「田漢與他的第二个妻子黄大琳」（刘平『文芸報』、二〇〇二年三月）。田漢・黄大琳夫婦の不和は、佐藤春夫の江南紀行文「秦淮画舫納涼記」（『東陽』第一卷第四号 一九三六年八月）、「曾遊南京」（『改造』第十九卷第十三号 一九三七年十一月）からも伺える。

の事情ではなく、「人間事」（この世のこと）として作品化されたのではあるまいか。このように、時代の転換期、時代遅れとされる「個人」が感じざるを得ない不安、無力感ないし喪失感こそ、小説「人間事」の「深いところ」を形成していると思われるのである。

## おわりに

芥川と異なり、佐藤春夫は七十代まで現役の文学者として活躍した。一九二七年の「混迷」と「恐怖」<sup>60)</sup>を抜け出す為に、やがて彼は「東洋伝統の回帰」という自己救済の道を辿り始めた。それに伴い、佐藤における「神経質」という言葉にも変化が生じている。一九三六年十月一九日、近代中国を代表する文学者魯迅の訃報を聞いて急遽執筆した魯迅論において、佐藤は魯迅文学に「近代欧洲から来た」「神経質な憂愁」が退けられている一方、「老荘以来伝来」した「快活な笑」を見て取っている。<sup>61)</sup>ここにおいて「神経質」は芸術精神を現わす言葉ではなく、否定的意味を示す言葉となったが、それは佐藤の「青春」との訣別を示すものであったと言えよう。

佐藤にとって「東洋伝統の回帰」の道は戦争に至る道でもあった。だが回帰の直前、親友である芥川龍之介の死を契機に、時代の転換期における複雑な思いが彼の胸中で錯綜したと思われる。その時に執筆された「人間事」では、中国人作家・田漢の青春への「感傷」や、「清朝の遺臣」辜鴻銘の「寂寥」の描写を通して、佐藤自身の「ぼんやりした不安」が浮かび上がっている。この「不安」こそ、プロレタリア作家の小堀甚二が指摘する『『人間事』の深いところ』ではないだろうか。小堀は「御本人はそれで何か深いものを表はし得てゐる積もりであらうが、あんなリリシズムなんか決して健康なインテリゲンチヤのスピリットのものではない。プチ、ブル芸術の典型的

---

60) 中村光夫『佐藤春夫論』文藝春秋新社 一九六二年一月、一三〇頁。

61) 「月光と少年と——魯迅の芸術」『中外商業新報』一九三六年十月二一日。『全集』第二一卷 一九九九年五月、二七一頁。

なのである」<sup>62)</sup>と一蹴してしまう。「健康」の基準はさておき、佐藤の「無頓着な感性」即ち「強烈な主観性」は創作に限らず評論にもよく現れており、「アジアの子」では極端な形でそれが表現されている。だが、このような「リリズム」が佐藤の「青春時代」の芸術性の本懐であると認めた時、彼の小説を異なる目で読むことが可能となるだろう。その時にこそ、「人間事」は単なる日中文人の交流録ではなく、激動の時代において作家が自己の青春と訣別した「小説」となり、時代の転換期における佐藤春夫の逡巡、そして「東洋伝統の回帰」と日中戦争期の国策協力への転換をより深く理解することが可能になるのではあるまいか。

---

62) 小堀甚二「佐藤春夫氏と田漢君」『田漢在日本』、三一八頁。